

青森県における「学校に対する心理的支援」に関する実態調査, および, ニーズ調査 I —幼稚園編—ⁱ

Actual conditions and needs of psychological support for schools in Aomori prefecture: a survey research in kindergartens

安 達 知 郎*

Tomoo ADACHI*

要旨

本研究の目的は、青森県の幼稚園に適した心理的支援の在り方を探索するための基礎資料として、青森県内の幼稚園に対する心理的支援の実態（認知度、経験）、および、それに対するニーズ（必要性認知）を調査することであった。青森県内の幼稚園全115園を対象として郵送法で質問紙調査を実施し、52園から回答を得た。結果、①心理的支援の認知度は、学習面、心理・社会面、進路面、いずれについてもあまり高くなかったが、とくに進路面でやや低かった。地域間比較では、学習面で概ね、下北、上北が西北に比べて、進路面で概ね、上北が中南、西北に比べて有意に高かった、②心理的支援の経験率は、学習面、心理・社会面、進路面、いずれについても低かった。低い中でも、学習面の経験率は比較的高かった、③心理的支援の必要性認知は、学習面、心理・社会面、進路面、いずれについても高かったが、とくに心理・社会面で高かったという3点が明らかになった。

キーワード：学校、心理的支援、青森県、幼稚園、ニーズ

1. 問題と目的

心理的支援はさまざまな領域において行われている。心理的支援の主な担い手である臨床心理士は、その職域として、教育領域、医療・保健領域、福祉領域、司法・矯正領域、労働・産業領域を挙げている。よって、教育領域は心理的支援が行われている代表的な領域のひとつであると考えられる。教育領域における心理的支援は、適応教室における支援などもあるが、その主となるのは学校における支援である。石隈（1999）は、学校における心理的支援において、子どもの学習面、心理・社会面、進路面の3側面に焦点を当てることの重要性を主張した。そして、学習面での支援の対象として、①自分の学習意欲を高める、②勤勉に学ぶ習慣を身につける、③学習面での困難さや遅れに対処する、④自分の学習スタイルや学力などの学習状況を理解する、⑤自分にあった学習スキルを獲

得する、⑥自分にあった学習計画を立てるという6つの問題を挙げた。また、心理面での支援の対象としては、①自分の考え・感情・行動を理解する、②自分に対する効力感（自信）を獲得し、向上させる、③ストレスに対処する、④ストレス対処法を獲得する、⑤情緒的な苦悩を軽減するという5つの問題を、社会面での支援の対象として、①友人・教師・家族との人間関係の状況を理解する、②学級集団や友人のグループに適応する、③対人関係の問題を解決する、④対人関係スキルを獲得するという4つの問題を挙げた。さらに、進路面での支援の対象として、①自分の進路適性を理解する、②自分の進路について検討するスキルを身につける、③自分の進路決定における迷いや不安に対処する、④自分の進路決定における家族や教師の意見に対処する、⑤自分の夢と現実（自分の適性、職場状況）のずれに対処するという5つの問題を挙げた。

日本の学校における心理的支援は、1995年のスクー

* 弘前大学大学院教育学研究科心理臨床相談室

Center for Clinical Psychology, Graduate school of Education, Hirosaki University.

ルカウンセラー活用調査研究委託事業によって、大きな変化を遂げた。1995年以降、学内の教員だけで担われていた心理的支援の一部が、学外の心理専門家であるスクールカウンセラーによっても担われるようになった（以下、本研究では、学内の教員による支援と学外の心理専門家による支援を区別し、後者を「学校に対する心理的支援」と呼ぶ）。スクールカウンセラー配置校は年々増加し、1995年に154校であったのが2013年には20,310校となった（文部科学省、2014）。このように順調に学校に対する心理的支援が拡大する一方で、新たな動きも生じつつある。ひとつは、学校教育の変化である。文部科学省（2015）は、「チーム学校」実現の視点のひとつとして、心理専門スタッフの学校での位置づけを明確にし、心理専門スタッフを法令に位置づけることを挙げた。つまり、今後、学校に対する心理的支援がこれまで以上に学校現場で重視されていくと考えられる。もうひとつは、心理職の立場の変化である。2015年9月、いわゆる、公認心理師法案が参議院で可決され、成立した。これに伴い、近い将来、心理職は国家資格化され、心理職はこれまで以上に国民の健康増進の社会的期待、責務を担うことが求められる。以上のように、学校に対する心理的支援を取り巻く状況が変化しつつある中で、学校に対する支援の新たな在り方を探索することが重要であると考えられる。

新たな支援の在り方を探索するためには、心理的支援に対するニーズがどのようなものであるのかを明確化することが重要である。小学校、中学校、高校に対する心理的支援については、これまで数多くのニーズ調査が行われてきた（たとえば、石隈、1999；中島ら、1997）が、幼稚園に対する心理的支援に関する実態調査、ニーズ調査は著者の見限り山本ら（2009）のみである（心理的支援を含む子育て支援に関するニーズ調査はいくつか見られる。しかし、それらの調査では具体的にどのような内容の支援にニーズがあるかということは明らかにされていない。たとえば、幼稚園に所属する母親5,490名、1,459名を対象として、子育て相談への希望などについて質問紙調査を行った望月ら（2013）は、母親の8割以上が保育者からのアドバイスを希望していることを明らかにしたが、どのような点についてアドバイスを求めているかは明らかにしなかった）。山本ら（2009）は、大阪府私立幼稚園に所属する教員74名、保護者684名、キンダーカウンセラー（幼稚園を訪問して心理的支援を行う心理専門家）74名を対象として、キンダーカウンセラーの役

割について、保護者、教員にはニーズを、キンダーカウンセラーには認知と活動経験を尋ねた。結果、ニーズについては、保護者自身の個人的な悩みについて保護者から相談を受けること（教員）、気になる子どもとの関わり方について教員と話し合うこと（教員、保護者）、子どもの発達上の不安・問題について保護者からの相談を受けること（教員、保護者）、気になる子どもへの個別のかかわり（教員）、子どもの心理面の不安・問題について保護者からの相談を受けること（教員、保護者）、子育て全般に関する悩みについて保護者から相談を受けること（教員、保護者）、外部の専門機関との連携（教員）という7項目で、得点平均が比較的高かった（4点中3点以上）。また、活動経験については、保護者自身の個人的な悩みについて保護者から相談を受けること、気になる子どもとの関わり方について教員と話し合うこと、保護者とのかかわり方について教員から相談を受けること、子どもの発達上の不安・問題について保護者からの相談を受けること、気になる子どもへの個別のかかわり、子どもの心理面の不安・問題について保護者からの相談を受けること、子育て全般に関する悩みについて保護者から相談を受けることという7項目で、得点平均が比較的高かった（4点中3点以上）。これらの結果から、保護者、教員ともに、心理的支援に対しては、発達上の問題、心理的な問題、子育て全般の悩みについて保護者から相談を受けること、気になる子どもの教員のかかわりについて教員と話すことを求めていると考えられる。

心理的支援を含む子育て支援については、幼稚園・保育園がそれを実施するかどうかには地域のニーズが大きな役割を果たすことが明らかにされている（増田ら、2009）。子育てを取り巻く環境（自治体による子育て支援政策、経済状況、家族構成など）が地域によって異なることを考えると、各地域において、心理的支援に対してどのようなニーズがあるのかを明らかにすることは重要であると考えられる。上記した山本ら（2009）の調査は大阪府私立幼稚園を対象としたものである。青森県における調査としては、青森県内の幼稚園、保育園の保護者、保育者を対象として子育て支援に関するニーズ調査を行った伴ら（2009）、管田ら（2009）、増田ら（2009）がある。しかし、これらは子育て支援の具体的な内容に関するものではない。そこで、本研究では、今後、青森県の幼稚園に適した心理的支援の在り方を探索するための基礎資料として、青森県内の幼稚園における心理的支援の実態（認知度、経験）、および、それに対するニーズ（必要性

認知)を調査することを目的とする。ただし、本研究では地域特性の多様性を読み取るため、調査は幼稚園単位で行うとともに、分析は地域単位(東青、中南、西北、下北、上北、三八の6地域)で行うこととする。

2. 方法

(1) 調査対象校

調査対象校は、青森県内の幼稚園全115園(東青32園、中南18園、西北11園、下北9園、上北15園、三八30園)であった。回答は、「相談業務をとりまとめている先生」に依頼した。

(2) 調査時期

2015年2月から3月に実施した。

(3) 手続き

郵送法で調査対象校に質問紙調査を依頼した。回答期間は約1ヶ月であった。回答に際しては、回答は任意であること、データは統計的に分析することなどを書面で説明した。

(4) 調査内容(本研究に関するもののみ)

①フェイスシート

学校について、学校種、在籍する子どもの数、在籍する教職員数、所在地、設立主体を、回答者について、職位、年齢、性別、教員歴、現在の所属校での勤続年数を尋ねた。

②現在受けている心理的支援の概要

現在、定期的に心理的支援を受けているかどうか(2件法)、受けている場合は頻度、心理専門家の保有資格、心理専門家の職種を尋ねた。頻度、心理専門家の保有資格、心理専門家の職種については、複数から支援を受けている場合に鑑み、回答欄を3個、設けた。

③「学校に対する心理的支援」についての認知度

学校において心理的支援が実際に行われる35場面(学習面:12場面、心理・社会面:13場面、進路面:10場面。詳細は表1)(石隈, 1999)を挙げ、そういった支援があることをどれくらい知っていたかを5件法(「1. 全く知らなかった」～「5. とても知っていた」)で尋ねた。ただし、認知度については、回答者個人の立場での回答を求めた。

④「学校に対する心理的支援」についての経験

認知度を尋ねた際に用いた35場面を挙げ、それぞれの場面での支援をここ3年間、受けたことがあるかどうか(2件法)を尋ねた。

⑤「学校に対する心理的支援」についての必要性認知

認知度を尋ねた際に用いた35場面を挙げ、それぞれ

の場面での支援をどれくらい必要と感じているかを5件法(「1. 全く必要ない」～「5. とても必要である」)で尋ねた。

⑥定期的な心理的支援に対するニーズ

今後、心理の専門家による「学校に対する心理的支援」を定期的に受けたいかを5件法(「1. 全く思わない」～「5. とても思う」)で尋ねた。

3. 結果

分析には SPSS ver22.0を用いた。分析に際しては、分析ごとに欠損値のあるデータを除外した。

(1) 分析対象校

回答を得た幼稚園52園(東青13園、中南9園、西北6園、下北7園、上北7園、三八10園)(回収率は全体で45.22%, 東青40.63%, 中南50.00%, 西北54.55%, 下北77.78%, 上北46.67%, 三八33.33%)を分析対象とした。

(2) 質問項目への回答

①フェイスシート(学校、回答者)

分析対象校に在籍する子どもの平均は86.02名(標準偏差61.34)、教職員の平均は11.90名(標準偏差8.27)であった。また、設立主体は国公立4校、私立47校、回答なし1校であった。

回答者の主な職位は園長であった(詳細は表2参照)。性別は男性7名、女性45名であった。平均年齢は53.12歳(標準偏差10.51)、平均教員歴は25.41年(標準偏差11.00)、現在の所属校での平均勤続年数は21.19年(標準偏差12.04)であった。

②現在受けている定期的な心理的支援の概要

現在、定期的に心理的支援を受けているかどうか、および、その地域間比較(Fisherの直接法)の結果を表3に示す。

現在、心理的支援を受けている幼稚園は4校のみであった。地域差は見られなかった。

定期的に心理的支援を受けている幼稚園がどれくらいの頻度で支援を受けているかを表4に示す。

毎月以上隔週未満、隔週以上毎週未満、毎日(常勤)が各1回答であった。

定期的に心理的支援を行っている支援者が保有している資格を表5に示す。

支援者が保有している資格では、臨床心理士がもっとも多かった。

支援者の職種はすべてスクールカウンセラーであった。

表1 質問項目の詳細

学習面	1	学習面（以下の2-12）の指導内容に関して、教材研究・教材作成をするとき
	2	子ども一人ひとりの興味・関心に合わせた指導法を考えるとき
	3	子ども一人ひとりの能力・学力に合わせた指導法を考えるとき
	4	子どもの主体性を生かす授業のあり方を考えるとき
	5	子どもが満足する授業の方法について考えるとき
	6	学習意欲の低い子どもへの対応を考えるとき
	7	授業中の学習態度のよくない子どもへの対応を考えるとき
	8	授業についてこれない子どもへの対応を考えるとき
	9	心身に障害をもつ子どもの学習指導について考えるとき
	10	学習について援助を必要とする子どもがいて、教科担任、部活動顧問など関係する教師とどのように連携したらよいか分からないとき
	11	学習について援助を必要とする子どもの保護者とどのように関わったらよいか分からないとき
	12	学習について援助を必要とする子どもがいて、児童相談所、相談機関、病院などの専門機関とどのように関わったらよいか分からないとき
心理・社会面	1	学級活動・ホームルーム活動を活性化させるための方法を知りたいとき
	2	部活動・生徒会活動・学校行事を通して子どもを生かすためにどんな指導をしてよいか分からないとき
	3	友人関係がうまくいかない、あるいは友だちがいないということで悩んでいる子どもへの対応について考えるとき
	4	登校拒否（不登校）の子どもへの対応について考えるとき
	5	無届の欠席や遅刻・早退が多くて気になる子どもへの対応について考えるとき
	6	心に悩みをもつ子どもへの対応について考えるとき
	7	言葉や服装・頭髮の乱れている子どもへの対応について考えるとき
	8	問題行動をおこしている子どもへの対応について考えるとき
	9	性の問題や異性との交際のことで悩みをもっている子どもへの対応について考えるとき
	10	家庭の出来事で悩んでいる子どもへの対応について考えるとき
	11	心理・社会面で援助を必要とする子どもがいて、教科担任、部活動顧問など関係する教師とどのように連携したらよいか分からないとき
	12	心理・社会面で援助を必要とする子どもの保護者とどのように関わったらよいか分からないとき
	13	心理・社会面で援助を必要とする子どもがいて、児童相談所、相談機関、病院などの専門機関とどのように関わったらよいか分からないとき
進路面	1	子どもの興味・関心から進路を考えるとき
	2	子どもの進路についての関心を高めたいとき
	3	入学試験・就職試験のための勉強法がまったく分からない子どもへの指導に困っているとき
	4	心身に障害があるために将来の進路に不安をもつ子どもがいるとき
	5	問題行動をおこしている子どもへの進路指導に困っているとき
	6	不登校・心に悩みをもつ子どもへの進路指導に困っているとき
	7	将来の進路について教師の考えと子どもの考えが一致しないとき
	8	将来の進路について子どもの考えと保護者の考えが一致しないとき
	9	将来の進路について教師の考えと保護者の考えが一致しないとき
	10	子どもの進路について、教科担任、部活動顧問など関係する教師とどのように連携したらよいか分からないとき

表2 回答者の職位

職位	回答数
園長	21
教頭	9
副園長	9
主任教諭，指導教諭，統括教諭，教務主任	9
事務	2
教諭	2
合計	52

表4 定期的な心理的支援の頻度

	地域						合計
	東青	中南	西北	下北	上北	三八	
毎年～							
隔月～							
毎月～		1					1
隔週～		1					1
毎週～							
週2回～							
毎日～		1					1
合計	2	1					3

表3 定期的な心理的支援の有無

	地域						合計	Fisherの 直接法
	東青	中南	西北	下北	上北	三八		
支援有	2	1		1			4	
支援無	11	8	6	6	6	10	47	
合計	13	9	6	7	6	10	51	

表5 支援者の保有資格

	地域						合計
	東青	中南	西北	下北	上北	三八	
臨床心理士	3	1					4
教育カウンセラー	1	1					2
保育心理士		1					1
学校心理士		1					1
わからない				1			1
合計	4	4		1			6

③「学校に対する心理的支援」の認知度

「学校に対する心理的支援」の認知度の学習面、心理・社会面、進路面、それぞれの全項目得点の平均値、標準偏差および、その地域間比較（分散分析，多重比較は Tukey HSD 法）の結果を表6に示す。

学習面，心理・社会面，進路面，いずれについても，得点平均はおおよそ3.00であった。また，地域間比較では，学習面，心理・社会面，進路面，いずれについても，有意差が見られた。多重比較の結果，進路面について，上北が中南，西北に比べ，認知度が高かった。

以下，学習面，心理・社会面，進路面の各質問項目について，平均値が2.50以下，3.50以上，あるいは，地域間比較（分散分析，多重比較は Tukey HSD 法）の結果が有意であったものの記述統計量，検定結果を表7に示す。

学習面については，教材研究・教材作成（項目1）に関する項目で，得点平均が2.50以下で低かった。一方で，心身に障害をもつ子どもへの学習指導（項目9），学習援助を必要とする子どもについての専門機関との連携（項目12）に関する項目で，得点平均が3.50以上で高かった。地域間比較では，子どもが満足する授業の方法（項目5），授業についてこれない子どもへの対応（項目8）に関する項目で有意差が見られた（多重比較の結果は有意ではなかった）。

心理・社会面については，集団活動への支援（項目1，2）に関する項目で，得点平均が2.50以下で低かった。一方で，友人関係で悩んでいる子どもへの対応（項目3），不登校の子どもへの対応（項目4），欠席・遅刻・早退が多い子どもへの対応（項目5），心に悩みをもつ子どもへの対応（項目6），問題行動をおこしている子どもへの対応（項目8），家庭の出来事で悩んでいる子どもへの対応（項目10），心理・社会面で援助を必要とする子どもについての保護者との連携（項目12），心理・社会面で援助を必要とする子どもについての専門機関との連携（項目13）に関する項目で，得点平均が3.50以上で高かった。地域間比較では，部活動・生徒会活動などでの指導（項目2），問題行動をおこしている子どもへの対応（項目8），家庭の出来事で悩んでいる子どもへの対応（項目10），心理・社会面での支援を必要とする子どもについての保護者との連携（項目12），心理・社会面で援助を必要とする子どもについての専門機関との連携（項目13）に関する項目で有意差が見られた。多重比較の結果，概ね，下北，上北が西北に比べ，認知度が高かった。

進路面については，子どもの興味・関心から進路を考えるととき（項目1），子どもの進路についての関心を高めたいとき（項目2），将来の進路について教員と子どもとの考えが一致しないとき（項目7）に関する項目で，得点平均が2.50以下で低かった（その他，入学試験・就職試験の勉強がまったく分からない子どもへの指導（項目3），将来の進路について子どもと保護者の考えが一致しないとき（項目8），将来の進路について教員と保護者の考えが一致しないとき（項目9），子どもの進路についての教員間の連携（項目10）に関する項目で，得点平均が2.60以下でありやや低かった）。心身に障害をもつ子どもの進路不安（項目4）に関する項目で，得点平均が3.50以上で高かった。地域間比較では，子どもの興味・関心から進路を考えるととき

表6 「学校に対する心理的支援」の認知度の概要

		地域							分散分析	
		東青	中南	西北	下北	上北	三八	合計	F値	多重比較
認知度	n	12	8	5	5	6	6	42	3.01*	
学習面	平均値	3.33	2.52	2.07	3.70	3.58	2.74	3.02		
<平均>	標準偏差	1.04	.83	1.04	.63	.74	.91	1.01		
認知度	n	12	7	6	6	6	7	44	3.40*	
心理・社会面	平均値	3.70	2.95	2.55	3.86	3.87	3.02	3.36		
<平均>	標準偏差	.87	.64	.94	.46	.94	.63	.88		
認知度	n	10	7	6	6	6	7	42	3.17*	中南, 西北<上北
進路面	平均値	2.92	2.13	2.13	3.23	3.72	2.49	2.76		
<平均>	標準偏差	.92	.73	.98	.74	1.07	.91	1.01		

* $p < .05$

表7 「学校に対する心理的支援」の認知度の詳細

		地域							分散分析	
		東青	中南	西北	下北	上北	三八	合計	F 値	多重比較
学習面	認学1 学習面（以下の2-12）の指導内容に関して、教材研究・教材作成をするとき	n	12	9	5	6	6	8	46	.67
	平均値	2.50	2.22	1.40	2.50	2.50	2.00	2.24		
	標準偏差	1.45	1.39	.55	1.38	1.38	1.07	1.27		
	認学5 子どもが満足する授業の方法について考えるとき	n	12	8	6	6	6	7	45	3.01*
	平均値	3.17	1.75	1.67	3.17	2.83	2.29	2.53		
	標準偏差	1.11	.89	.82	1.17	1.47	.95	1.20		
	認学8 授業についてこれない子どもへの対応を考えるとき	n	12	8	6	5	6	8	45	2.71*
	平均値	3.42	2.63	2.50	4.40	4.17	3.38	3.36		
	標準偏差	1.24	1.30	1.64	.55	.41	1.06	1.26		
	認学9 心身に障害をもつ子どもの学習指導について考えるとき	n	12	9	6	6	6	8	47	2.03
	平均値	4.00	3.67	2.83	4.17	4.50	3.50	3.79		
	標準偏差	.95	.87	1.72	.75	.55	1.07	1.08		
心理・社会面	認学12 学習について援助を必要とする子どもがいて、児童相談所、相談機関、病院などの専門機関とどのように関わったらよいか分からないとき	n	12	9	6	6	6	8	47	1.13
	平均値	3.83	3.11	3.00	4.00	4.17	3.50	3.60		
	標準偏差	1.03	1.45	1.55	.63	1.17	1.07	1.19		
	認心1 学級活動・ホームルーム活動を活性化させるための方法を知りたいとき	n	12	7	6	6	6	7	44	2.39
	平均値	3.00	1.71	1.50	2.33	2.50	2.43	2.34		
	標準偏差	1.13	.95	.55	1.37	1.05	.79	1.10		
	認心2 部活動・生徒会活動・学校行事を通して子どもを生かすためにどんな指導をしてよいか分からないとき	n	12	7	6	6	6	7	44	2.62*
	平均値	3.00	1.71	1.50	2.83	2.83	2.43	2.45		
	標準偏差	1.13	.95	.55	1.47	1.17	.79	1.15		
	認心3 友人関係がうまくいかない、あるいは友だちがいないということに悩んでいる子どもへの対応について考えるとき	n	12	7	6	6	6	8	45	.79
	平均値	4.00	3.57	3.17	4.00	3.83	3.38	3.69		
	標準偏差	.95	1.13	1.47	.00	1.17	1.06	1.04		
心理・社会面	認心4 登校拒否（不登校）の子どもへの対応について考えるとき	n	12	8	6	6	6	8	46	1.72
	平均値	4.17	3.88	3.17	4.50	4.50	3.50	3.96		
	標準偏差	1.03	.83	1.47	.55	1.22	1.07	1.09		
	認心5 無届の欠席や遅刻・早退が多くて気になる子どもへの対応について考えるとき	n	12	8	6	6	6	8	46	1.66
	平均値	4.00	3.63	3.17	4.50	4.00	3.25	3.76		
	標準偏差	.95	.74	1.47	.55	1.26	1.04	1.06		
	認心6 心に悩みをもつ子どもへの対応について考えるとき	n	12	8	6	6	7	9	48	1.40
	平均値	4.00	3.88	3.33	4.50	4.14	3.33	3.85		
	標準偏差	.95	.83	1.51	.55	1.07	1.12	1.05		
	認心8 問題行動をおこしている子どもへの対応について考えるとき	n	12	8	6	6	7	8	47	4.56** 西北<東青, 下北, 上北
	平均値	3.92	3.50	2.33	4.33	4.57	3.38	3.70		
	標準偏差	.90	1.07	1.03	.82	.53	1.19	1.12		
進路面	認心10 家庭の出来事で悩んでいる子どもへの対応について考えるとき	n	12	7	6	6	6	8	45	2.75* 西北<下北
	平均値	3.92	3.14	2.50	4.33	3.83	3.13	3.51		
	標準偏差	.90	1.07	1.22	.82	1.17	1.13	1.14		
	認心12 心理・社会面で援助を必要とする子どもの保護者とどのように関わったらよいか分からないとき	n	12	7	6	6	7	8	46	4.00** 西北<下北, 上北
	平均値	3.83	2.86	2.33	4.17	4.43	3.38	3.54		
	標準偏差	.94	1.21	1.03	.75	1.13	1.06	1.19		
	認心13 心理・社会面で援助を必要とする子どもがいて、児童相談所、相談機関、病院などの専門機関とどのように関わったらよいか分からないとき	n	12	7	6	6	7	9	47	3.09* 中南, 西北<上北
	平均値	3.67	3.00	2.83	4.17	4.71	3.56	3.66		
	標準偏差	.98	1.29	1.47	.75	.49	1.01	1.15		
	認進1 子どもの興味・関心から進路を考えるとき	n	11	7	6	6	6	7	43	3.56* 中南, 西北<上北
	平均値	2.82	1.71	1.83	2.67	3.33	2.14	2.44		
	標準偏差	1.08	.76	.41	.82	.82	.90	.98		
	認進2 子どもの進路についての関心を高めたいとき	n	11	8	6	6	6	7	44	3.25* 西北<上北
進路面	平均値	2.82	2.00	1.67	3.00	3.33	2.00	2.48		
	標準偏差	1.08	1.07	.52	.89	.82	1.00	1.07		
	認進4 心身に障害があるために将来の進路に不安をもつ子どもがいるとき	n	12	8	6	6	7	7	46	1.89
	平均値	3.67	3.38	2.50	4.00	4.29	3.00	3.50		
	標準偏差	.98	1.19	1.64	1.10	1.25	1.29	1.28		
	認進5 問題行動をおこしている子どもへの進路指導に困っているとき	n	11	7	6	6	7	7	44	2.50*
	平均値	3.64	2.57	2.67	4.00	4.29	3.00	3.39		
	標準偏差	1.03	1.13	1.51	1.10	1.25	1.15	1.28		
	認進7 将来の進路について教師の考えと子どもの考えが一致しないとき	n	10	7	6	6	6	7	42	2.42
	平均値	2.70	1.71	2.00	2.83	3.50	2.29	2.50		
	標準偏差	1.25	.76	1.10	.98	1.05	.95	1.13		
	認進8 将来の進路について子どもの考えと保護者の考えが一致しないとき	n	11	7	6	6	6	7	43	2.84* 中南<上北
	平均値	3.00	1.71	2.00	2.83	3.67	2.29	2.60		
	標準偏差	1.34	.76	1.10	.98	1.21	.95	1.22		
進路面	認進9 将来の進路について教師の考えと保護者の考えが一致しないとき	n	11	7	6	6	6	7	43	2.62*
	平均値	3.00	1.71	2.00	2.83	3.50	2.29	2.58		
	標準偏差	1.34	.76	1.10	.98	1.05	.95	1.18		
	認進10 子どもの進路について、教科担任、部活動顧問など関係する教師とどのように連携したらよいか分からないとき	n	10	7	6	6	6	7	42	3.13* 中南<上北
	平均値	2.60	1.71	2.00	3.17	3.67	2.57	2.60		
	標準偏差	1.07	.76	1.10	.98	1.21	.98	1.15		

* $p < .05$, ** $p < .01$

(項目1), 子どもの進路に関する関心を高めたいとき(項目2), 問題行動をおこしている子どもへの進路指導(項目5), 将来の進路について子どもと保護者との考えが一致しないとき(項目8), 将来の進路について教員と保護者の考えが一致しないとき(項目9), 子どもの進路についての教員間の連携(項目10)に関する項目で有意差が見られた。多重比較の結果, 概ね, 上北が中南, 西北に比べて, 認知度が高かった。

④「学校に対する心理的支援」についての経験

「学校に対する心理的支援」についての経験の学習面, 心理・社会面, 進路面, それぞれの全項目度数の平均値を表8に示す。

経験有の度数の平均値は学習面で3.75, 心理・社会面で2.23, 進路面で1.60であった。

以下, 学習面, 心理・社会面, 進路面の各質問項目について, 経験率が.05以下, .10以上, および, その地域間比較(Fisherの直接法)の結果が有意であったものの度数, 検定結果を表9に示す。

学習面については, 教材研究・教材開発(項目1), 子どもが満足する授業方法(項目5), 学習援助を必要とする子どもについての教員間の連携(項目10)に関する項目で, 経験率が.05以下で低かった。一方で, 経験率が.20以下で高い項目は見られなかった。ただし, 全般的に経験率が低い中でも, 子ども一人ひとりの興味・関心に合わせた指導法(項目2), 子ども一人ひとりの能力・学力に合わせた指導法(項目3), 学習意欲の低い子どもへの対応(項目6), 心身に障害をもつ子どもへの学習指導(項目9), 学習援助を必要とする子どもについての専門機関との連携(項目12)に関する項目で, 経験率が.10以上で比較的高かった。地域間比較では, 有意差は見られなかった。

心理・社会面については, 集団活動への支援(項目1, 2), 不登校の子どもへの対応(項目4), 欠席, 遅刻, 早退が多い子どもへの対応(項目5), 言動などの

乱れている子どもへの対応(項目7), 性の問題を抱える子どもへの対応(項目9), 家庭の出来事で悩んでいる子どもへの対応(項目10), 心理・社会面で援助を必要とする子どもについての教員間の連携(項目11)に関する項目で, 経験率が.05以下で低かった。一方で, 経験率が.20以下で高い項目は見られなかった。ただし, 全般的に経験率が低い中でも, 問題行動をおこしている子どもへの対応(項目8)に関する項目で, 経験率が.10以上で比較的高かった。地域間比較では, 有意差は見られなかった。

進路面については, 子どもの進路についての関心を高めたいとき(項目2), 入学試験・就職試験の勉強法がまったく分からない子どもへの指導(項目3), 問題をおこしている子どもへの進路指導(項目5), 将来の進路について教員と子どもの考えが一致しないとき(項目7), 将来の進路について子どもと保護者の考えが一致しないとき(項目8), 将来の進路について教員と保護者の考えが一致しないとき(項目9), 子どもの進路についての教員間の連携(項目10)に関する項目で, 経験率が.05以下で低かった。一方で, 経験率が.20以下で高い項目は見られなかった。地域間比較では, 有意差は見られなかった。

⑤「学校に対する心理的支援」についての必要性認知
「学校に対する心理的支援」についての必要性認知の学習面, 心理・社会面, 進路面, それぞれの全項目得点の平均値, 標準偏差, および, その地域間比較(分散分析, 多重比較はTukey HSD法)の結果を表10に示す。

学習面, 心理・社会面, 進路面, いずれについても, 得点平均は概ね3.50以上であり高かった。また, 地域間比較では, 学習面, 心理・社会面, 進路面, いずれについても, 有意差は見られなかった。

以下, 学習面, 心理・社会面, 進路面の各質問項目について, 平均値が2.50以下, 3.50以上, あるいは,

表8 「学校に対する心理的支援」の経験の概要

		地域						
		東青	中南	西北	下北	上北	三八	合計
経験	経験有	1. 83			1. 33		. 58	3. 75
学習面	経験無	9. 83	8. 00	6. 00	4. 67	7. 00	6. 67	42. 17
<合計>	合計	11. 67	8. 00	6. 00	6. 00	7. 00	7. 25	45. 92
経験	経験有	1. 23		. 08	. 31	. 08	. 54	2. 23
心理・社会面	経験無	10. 46	8. 00	5. 92	5. 69	6. 62	6. 69	43. 38
<合計>	合計	11. 69	8. 00	6. 00	6. 00	6. 69	7. 23	45. 62
経験	経験有	1. 00			. 30		. 30	1. 60
進路面	経験無	10. 10	8. 00	6. 00	5. 70	7. 00	6. 70	43. 50
<合計>	合計	11. 10	8. 00	6. 00	6. 00	7. 00	7. 00	45. 10

表9 「学校に対する心理的支援」の経験の詳細

			地域							Fisher の	
			東青	中南	西北	下北	上北	三八	合計	直接法	
心理・ 社会面	経学 1 学習面（以下の2-12）の指導内容に関して、教材研究・教材作成をするとき	経験有	1			1			2		
		経験無	11	8	6	5	7	8	45		
		合計	12	8	6	6	7	8	47		
	経学 2 子ども一人ひとりの興味・関心に合わせた指導法を考えると	経験有	2			2		1	5		
		経験無	10	8	6	4	7	7	42		
		合計	12	8	6	6	7	8	47		
	経学 3 子ども一人ひとりの能力・学力に合わせた指導法を考えると	経験有		2		2		1	5		
		経験無	10	8	6	4	7	7	42		
		合計	12	8	6	6	7	8	47		
	経学 5 子どもが満足する授業の方法について考えるとき	経験有	1			1			2		
		経験無	11	8	6	5	7	7	44		
		合計	12	8	6	6	7	7	46		
経学 6 学習意欲の低い子どもへの対応を考えると	経験有	2			2		1	5			
	経験無	10	8	6	4	7	6	41			
	合計	12	8	6	6	7	7	46			
心理・ 社会面	経学 9 心身に障害をもつ子どもの学習指導について考えるとき	経験有	2			2		2	6		
		経験無	10	8	6	4	7	4	39		
		合計	12	8	6	6	7	6	45		
	経学10 学習について援助を必要とする子どもがいて、教科担任、部活動顧問など関係する教師とどのように連携したらよいか分からないとき	経験有						1	1		
		経験無	10	8	6	6	7	6	43		
		合計	10	8	6	6	7	7	44		
	経学12 学習について援助を必要とする子どもがいて、児童相談所、相談機関、病院などの専門機関とどのように関わったらよいか分からないとき	経験有	3			1		1	5		
		経験無	9	8	6	5	7	7	42		
		合計	12	8	6	6	7	8	47		
	心理・ 社会面	経心 1 学級活動・ホームルーム活動を活性化させるための方法を知りたいとき	経験有	1						1	
			経験無	11	8	6	6	6	7	44	
			合計	12	8	6	6	6	7	45	
経心 2 部活動・生徒会活動・学校行事を通して子どもを生かすためにどんな指導をしてよいか分からないとき		経験有							0		
		経験無	11	8	6	6	6	7	44		
		合計	11	8	6	6	6	7	44		
経心 4 登校拒否（不登校）の子どもへの対応について考えるとき		経験有	2						2		
		経験無	10	8	6	6	6	7	43		
		合計	12	8	6	6	6	7	45		
経心 5 無届の欠席や遅刻・早退が多くて気になる子どもへの対応について考えるとき		経験有	1						1		
		経験無	10	8	6	6	6	7	43		
		合計	11	8	6	6	6	7	44		
心理・ 社会面	経心 7 言葉や服装・頭髮の乱れている子どもへの対応について考えるとき	経験有	1					1	2		
		経験無	11	8	6	6	7	6	44		
		合計	12	8	6	6	7	7	46		
	経心 8 問題行動をおこしている子どもへの対応について考えるとき	経験有	2		1	1		1	5		
		経験無	10	8	5	5	7	6	41		
		合計	12	8	6	6	7	7	46		
	経心 9 性の問題や異性との交際のことで悩みをもっている子どもへの対応について考えるとき	経験有	1						1		
		経験無	11	8	6	6	7	7	45		
		合計	12	8	6	6	7	7	46		
	経心10 家庭の出来事で悩んでいる子どもへの対応について考えるとき	経験有	1					1	2		
		経験無	11	8	6	6	7	6	44		
		合計	12	8	6	6	7	7	46		
進路面	経心11 心理・社会面で援助を必要とする子どもがいて、教科担任、部活動顧問など関係する教師とどのように連携したらよいか分からないとき	経験有						1	1		
		経験無	10	8	6	6	7	6	43		
		合計	10	8	6	6	7	7	44		
	経進 2 子どもの進路についての関心を高めたいとき	経験有	1			1			2		
		経験無	11	8	6	5	7	7	44		
		合計	12	8	6	6	7	7	46		
	経進 3 入学試験・就職試験のための勉強法がまったく分からない子どもへの指導に困っているとき	経験有							0		
		経験無	10	8	6	6	7	7	44		
		合計	10	8	6	6	7	7	44		
	経進 7 将来の進路について教師の考えと子どもの考えが一致しないとき	経験有							0		
		経験無	10	8	6	6	7	7	44		
		合計	10	8	6	6	7	7	44		
経進 8 将来の進路について子どもの考えと保護者の考えが一致しないとき	経験有	1						1			
	経験無	10	8	6	6	7	7	44			
	合計	11	8	6	6	7	7	45			
経進 9 将来の進路について教師の考えと保護者の考えが一致しないとき	経験有	1						1			
	経験無	11	8	6	6	7	7	45			
	合計	12	8	6	6	7	7	46			
経進10 子どもの進路について、教科担任、部活動顧問など関係する教師とどのように連携したらよいか分からないとき	経験有							0			
	経験無	10	8	6	6	7	7	44			
	合計	10	8	6	6	7	7	44			

表10 「学校に対する心理的支援」の必要性認知の概要

		地域							分散分析	
		東青	中南	西北	下北	上北	三八	合計	F 値	多重比較
必要性	n	9	7	6	6	7	6	41	1.70	
学習面	平均値	3.41	3.06	3.39	4.40	3.23	3.49	3.47		
<平均>	標準偏差	.74	.79	.95	.61	1.37	.73	.94		
必要性	n	7	7	5	6	6	7	38	1.30	
心理・社会面	平均値	3.64	3.47	3.42	4.45	4.21	3.76	3.82		
<平均>	標準偏差	1.00	.94	1.18	.38	.88	.81	.91		
必要性	n	8	7	6	6	6	7	40	.87	
進路面	平均値	3.40	3.19	3.02	4.07	3.77	3.54	3.49		
<平均>	標準偏差	.87	1.17	1.06	.66	1.48	.75	1.01		

その地域間比較（分散分析，多重比較は Tukey HSD 法）の結果が有意であったものの記述統計量，検定結果を表11に示す。

学習面については，得点平均が2.50以下で低い項目は見られなかった。一方で，授業についてこれない子どもへの対応（項目8），心身に障害をもつ子どもへの学習指導（項目9），学習支援を必要とする子どもについての教員間の連携（項目10），学習支援を必要とする子どもについての保護者との連携（項目11），学習支援を必要とする子どもについての専門機関との連携（項目12）に関する項目で，得点平均が3.50以上で高かった。とくに，心身に障害をもつ子どもへの学習指導（項目9），学習援助を必要とする子どもについての専門機関との連携（項目12）に関する項目で，得点平均が4.00以上でとても高かった。地域間比較では，子どもの主体性をいかす授業（項目4）に関する項目で有意差が見られた。多重比較の結果，下北が上北に比べ，必要性認知が高かった。

心理・社会面については，得点平均が2.50以下で低い項目は見られなかった。一方で，友人関係で悩んでいる子どもへの対応（項目3），不登校の子どもへの対応（項目4），欠席・遅刻・早退が多い子どもへの対応（項目5），心に悩みをもつ子どもへの対応（項目6），言動などの乱れている子どもへの対応（項目7），問題行動をおこしている子どもへの対応（項目8），性の問題で悩んでいる子どもへの対応（項目9），家庭の出来事で悩んでいる子どもへの対応（項目10），心理・社会面で援助を必要とする子どもについての教員間の連携（項目11），心理・社会面で援助を必要とする子どもについての保護者との連携（項目12），心理・社会面で援助を必要とする子どもについての専門機関との連携（項目13）に関する項目で，得点平均が3.50以上で高かった。とくに，心に悩みをもつ子どもへの対応（項目6），問題行動をおこしている子どもへの対応

（項目8），心理・社会面で援助を必要とする子どもについての保護者との連携（項目12），心理・社会面で援助を必要とする子どもについての専門機関との連携（項目13）に関する項目で，得点平均が4.00以上でとても高かった。地域間比較では，有意差は見られなかった。

進路面については，得点平均が2.50以下で低い項目は見られなかった。一方で，心身に障害をもつ子どもの進路不安（項目4），問題行動をおこしている子どもへの進路指導（項目5），心に悩みをもつ子どもへの進路指導（項目6），進路について教員と保護者の考えが一致しないとき（項目9）に関する項目で，得点平均が3.50以上で高かった。地域間比較では，有意差は見られなかった。

⑥定期的な心理的支援に対するニーズ

定期的な心理的支援に対するニーズの平均値，標準偏差，および，その地域間比較（分散分析，多重比較は Tukey HSD 法）の結果を表12に示す。

得点平均は3.45であった。地域間比較では，有意差は見られなかった。

4. 考察

（1）現在，受けている定期的な心理的支援の実態，および，定期的な心理的支援に対するニーズ

現在，定期的に心理的支援を受けているのは52園のうち，4園のみであった。定期的な心理的支援の有無について地域差は見られなかった。支援の頻度は，1園は毎日，2園は毎月以上毎週末の頻度で，心理的支援を受けていた。一方で，定期的な心理的支援に対するニーズの得点平均は3.45であり，やや高かった。ニーズについても地域差は見られなかった。つまり，幼稚園における定期的な心理的支援の有無，ニーズに地域差はなく，総じて心理的支援に対するニーズは高

表11 「学校に対する心理的支援」の必要性認知の詳細

		地域							分散分析	
		東青	中南	西北	下北	上北	三八	合計	F 値	多重比較
学習面	必学4 子どもの主体性を生かす授業のあり方を考えるとき	n	11	7	6	6	7	6	43	2.69* 上北<下北
		平均値	3.45	2.57	3.00	4.17	2.43	3.00	3.12	
		標準偏差	1.04	.53	1.10	1.17	1.13	.89	1.10	
	必学8 授業についてこれない子どもへの対応を考えるとき	n	10	7	6	6	7	7	43	1.85
		平均値	3.50	2.86	3.17	4.67	3.57	3.57	3.53	
		標準偏差	.71	1.21	.98	.52	1.90	.98	1.18	
	必学9 心身に障害をもつ子どもの学習指導について考えるとき	n	11	7	6	6	7	7	44	.76
		平均値	4.27	4.14	4.00	4.83	4.00	4.57	4.30	
		標準偏差	.65	.90	1.26	.41	1.53	.79	.95	
	必学10 学習について援助を必要とする子どもがいて、教科担任、部活動顧問など関係する教師とどのように関連したらよいか分からないとき	n	9	7	6	6	7	7	42	1.66
		平均値	3.56	2.86	3.33	4.50	3.86	3.29	3.55	
		標準偏差	.88	1.35	1.03	.55	1.57	.95	1.15	
	必学11 学習について援助を必要とする子どもの保護者とのように関わったらよいか分からないとき	n	11	7	6	6	7	7	44	.41
		平均値	3.91	3.71	3.67	4.50	4.00	4.00	3.95	
		標準偏差	.83	1.50	1.21	.55	1.53	1.15	1.12	
	必学12 学習について援助を必要とする子どもがいて、児童相談所、相談機関、病院などの専門機関とどのように関わったらよいか分からないとき	n	11	7	6	6	7	8	45	.97
		平均値	4.00	3.43	3.83	4.83	4.00	4.00	4.00	
		標準偏差	.89	1.62	1.17	.41	1.53	1.07	1.17	
心理・社会面	必心3 友人関係がうまくいかない、あるいは友だちがいけないということで悩んでいる子どもへの対応について考えるとき	n	11	8	6	6	7	8	46	1.93
		平均値	3.73	3.63	3.00	4.00	4.71	3.63	3.78	
		標準偏差	.90	1.41	1.41	.63	.49	1.06	1.09	
	必心4 登校拒否（不登校）の子どもへの対応について考えるとき	n	11	8	6	6	7	7	45	1.24
		平均値	3.73	3.75	3.17	4.67	4.29	3.86	3.89	
		標準偏差	.90	1.49	1.47	.52	1.11	1.21	1.17	
	必心5 無届の欠席や遅刻・早退が多くて気になる子どもへの対応について考えるとき	n	10	8	6	6	7	7	44	1.61
		平均値	3.50	3.50	3.00	4.67	4.14	3.71	3.73	
		標準偏差	.85	1.51	1.41	.52	1.21	1.11	1.19	
	必心6 心に悩みをもつ子どもへの対応について考えるとき	n	10	8	5	6	7	7	43	1.02
		平均値	4.20	4.25	3.80	4.83	4.57	4.00	4.28	
		標準偏差	.79	.89	1.30	.41	.79	1.15	.91	
	必心7 言葉や服装・頭髪の乱れている子どもへの対応について考えるとき	n	10	7	5	6	6	7	41	.73
		平均値	3.30	3.14	3.40	4.00	4.00	3.43	3.51	
		標準偏差	1.34	1.21	1.14	.89	.63	.98	1.08	
	必心8 問題行動をおこしている子どもへの対応について考えるとき	n	9	7	6	6	7	7	42	1.72
		平均値	3.89	4.00	3.67	4.67	4.71	4.43	4.21	
		標準偏差	1.05	.82	1.21	.52	.49	.79	.90	
	必心9 性の問題や異性とのおのこで悩むをもっている子どもへの対応について考えるとき	n	10	7	5	6	6	7	41	1.25
		平均値	3.40	3.43	3.20	4.67	4.00	4.00	3.76	
		標準偏差	1.26	1.40	1.10	.52	1.55	1.15	1.24	
	必心10 家庭の出来事で悩んでいる子どもへの対応について考えるとき	n	10	8	5	6	6	7	42	.69
		平均値	3.70	3.88	3.60	4.50	4.33	3.86	3.95	
		標準偏差	1.06	1.46	1.14	.55	.82	1.07	1.06	
	必心11 心理・社会面で援助を必要とする子どもがいて、教科担任、部活動顧問など関係する教師とどのように関連したらよいか分からないとき	n	8	7	5	6	6	7	39	.92
		平均値	3.38	3.29	3.80	4.50	4.00	3.86	3.77	
		標準偏差	1.06	1.25	1.30	.55	1.67	1.07	1.18	
	必心12 心理・社会面で援助を必要とする子どもの保護者とのように関わったらよいか分からないとき	n	11	8	5	6	7	8	45	1.00
		平均値	3.91	4.25	4.00	4.83	4.43	4.38	4.27	
		標準偏差	.94	.89	1.22	.41	.98	.74	.89	
	必心13 心理・社会面で援助を必要とする子どもがいて、児童相談所、相談機関、病院などの専門機関とどのように関わったらよいか分からないとき	n	11	7	5	6	6	8	43	.73
		平均値	4.09	4.00	4.00	4.83	4.33	4.13	4.21	
		標準偏差	.94	1.00	1.22	.41	1.03	.83	.91	
進路面	必進4 心身に障害があるために将来の進路に不安をもつ子どもがいるとき	n	10	8	6	6	6	7	43	1.62
		平均値	3.70	3.75	3.17	4.83	4.33	4.29	3.98	
		標準偏差	1.16	1.49	.98	.41	1.63	.76	1.20	
	必進5 問題行動をおこしている子どもへの進路指導に困っているとき	n	9	8	6	6	6	7	42	1.04
		平均値	3.56	3.50	3.33	4.33	4.33	4.29	3.86	
		標準偏差	1.24	1.41	1.03	.82	1.63	.76	1.20	
	必進6 不登校・心に悩みをもつ子どもへの進路指導に困っているとき	n	9	7	6	6	6	7	41	1.07
		平均値	3.89	3.57	3.17	4.33	4.33	4.29	3.93	
		標準偏差	.93	1.51	1.17	.82	1.63	.76	1.17	
	必進9 将来の進路について教師の考えと保護者の考えが一致しないとき	n	10	7	6	6	6	7	42	.71
		平均値	3.80	3.29	3.00	4.00	3.67	3.29	3.52	
		標準偏差	.92	1.25	1.10	.89	1.63	1.11	1.13	

* $p < .05$

表12 定期的な心理的支援に対するニーズ

	地域							分散分析	
	東青	中南	西北	下北	上北	三八	合計	F 値	多重比較
n	12	9	6	6	5	9	47	.98	
平均値	3.58	3.33	3.33	3.67	4.00	3.00	3.45		
標準偏差	.79	.87	1.03	1.03	1.00	.87	.90		

いが、実際の支援は盛んではなかった。しかしその一方で、心理的支援が充実している園もみられ、定期的な心理的支援は園によって現状が大きく異なった。

このような背景には、幼稚園の設立主体の多くが私立であることが関係していると考えられる。設立主体が私立であるため、自治体からの財政的支援は無く、心理的支援を充実させる場合の財政的負担は、園それぞれが担うことになる。増田ら（2009）は、心理的支援を含む子育て支援の実施に財政的問題が大きく影響していることを明らかにした。財政的問題への対応が各幼稚園に求められるため、幼稚園に対する定期的な心理的支援は全般的に充実していない一方で、一部、心理的支援に積極的な園では定期的な心理的支援が充実していると考えられる。

(2)「学校に対する心理的支援」の認知度

「学校に対する心理的支援」の認知度を、学習面、心理・社会面、進路面、それぞれの全項目得点の平均値で見ると、いずれも得点平均は3.00前後であり、認知度は高くも低くもなかった。各項目得点の平均値で見ると、2.50以下の項目が学習面で1項目、心理・社会面で2項目、進路面で3項目（2.60以下の項目が4項目）、3.50以上の項目が学習面で2項目、心理・社会面で8項目、進路面で1項目であった。つまり、心理・社会面で認知度が高い質問項目が多く、進路面で認知度が低い項目が多かった。

以上のことから、幼稚園では心の問題を抱えている子どもへの支援を中心として、「学校に対する心理的支援」が認知されていると考えられる。つまり、臨床心理学的支援が「学校における心理的支援」の核として認知されていると考えられる。そもそも「心理的支援」が不登校、発達障害への対応といった臨床心理学支援を中心になされてきた（千原，2009）ために、「心理的支援」が臨床心理学的支援として認知されていると考えられる。今後、支援者が心理・社会面に限らず、学習面、進路面への心理的支援を実践、発信していくことで、学習面、進路面への認知度も高まると考えられる。

(3)「学校に対する心理的支援」の経験

「学校に対する心理的支援」の経験を、学習面、心理・社会面、進路面、それぞれの全項目度数の平均値で見ると、学習面、心理・社会面、進路面の順に度数平均が高かった。しかし、いずれも度数平均は5以下、経験率は.10以下で低かった。各項目の経験率で見ると、経験率が.20以上で高い項目は見られなかったが、その中でも比較的经验率が高い.10以上の項目が学習面で5項目、心理・社会面で1項目であった。項目内容で見ると、学習面に関する項目の中でも、それぞれの興味、関心、能力、学力、心の悩みなどに合わせた対応に関する項目で、経験率が比較的高かった。

本研究では経験率がそもそも低かったため、十分な結論を導き出すことはできない。更なる検証が必要であることを念頭に置いたうえで、以下に、本研究の結果から示唆されることを述べる。本研究の結果から、幼稚園では学習面での支援が比較的多く行われていると考えられる。これに対して、認知度については心理・社会面での支援の認知度が高かった。つまり、心理的支援のどの側面がより認知されているかとより実践されているかの間にはギャップがある。この背景には、幼児の特徴、幼稚園の特徴が考えられる。成人の場合、心理的な問題は不眠、気分の落ち込み、希死念慮など、日常的な行動とは区別される特異な行動として表現される。しかし、幼児の場合、心理的な問題は分化されていない上に、未熟である（三宅，1994）。つまり、幼児の心理的問題は、特異な行動ではなく、日常的な行動の中で表現されると考えられる。たとえば、幼児であれば、言うことをきかない、機嫌が悪い、泣くといった行動で表現されると考えられる。よって、幼児に対する心理的支援は、幼児が示す特異な行動に対してなされるというよりは、日常的な行動に対してなされると考えられる。さらに、幼稚園において、幼児は知識だけでなく、日常的な習慣を学ぶと考えられる。つまり、幼稚園での学習は、幼児の日常的な活動に対してなされると考えられる。以上のような幼児の特徴、幼稚園の特徴のため、心理・社会面での支援が心理的支援と認知されている一方で、実際の心理的支援は学習面に対してなされていると考えられ

る。

(4)「学校に対する心理的支援」の必要性認知

「学校に対する心理的支援」の必要性認知を、学習面、心理・社会面、進路面、それぞれの全項目得点の平均値で見ると、いずれも得点平均が概ね3.50以上であり、必要性認知は高かった。各項目得点の平均値で見ると、2.50以下の項目は見られなかった一方で、3.50以上の項目は学習面で5項目、心理・社会面で11項目、進路面で4項目であった。つまり、いずれでも必要性認知が高い項目が多く見られたが、とくに心理・社会面で多かった。これは山本ら（2009）の結果と一致する。

必要性認知は全般的に高く、心理的支援に対するニーズは高いと考えられる。とくに、心理・社会面での支援の必要性が高い。心理・社会面での支援が中心にあるというのは、認知度と同じ傾向であった。この背景には、「心理的支援」がそもそも、臨床心理学的支援を中心として認知されていることがあると考えられる。認知度はそれほど高くないが必要性認知は高いということは、ニーズはあるが、その具体的な支援の在り方は幼稚園関係者に見えていないということである。学習面、進路面については、幼稚園関係者自身も支援の具体像を意識しているわけではないが、潜在的なニーズは高いと考えられる。

(5) 各地域の特徴

経験、必要性認知については地域差は見られず、経験率は全般的に低く、必要性認知は全般的に高かった。一方、認知度、とくに心理・社会面、進路面での支援の認知度については地域差が見られた。具体的には、概ね、上北、下北の認知度が西北、中南に比べ、高かった。さらに、統計的に有意な結果は得られていないが、東青も比較的、認知度が高かった。青森県の地域の中では、県庁所在地である青森市を中心とする東青がもっとも都市機能が充実していると考えられる。それに続いて、弘前市を中心とする中南、八戸市を中心とする三八が、さらに青森市、弘前市との交通の便もよい五所川原市を中心とする西北が比較的、都市機能が充実していると考えられる。交通の便が悪い下北、上北は、他4地域に比べ、都市機能はそれほど充実していないと考えられる。このような地域特性と認知度の関連を見てみると、都市機能が充実している東青、および、都市機能がそれほど充実していない下北、上北で認知度が高いと考えられる。この両方で認知度が高い要因は異なると考えられる。都市機能が充実している東青では、行政機関、医療機関を通じて、

幼児に対するさまざまな支援が分化している上に、心理的支援の専門性が浸透しているために、認知度が高かったと考えられる。一方で、都市機能がそれほど充実していない下北、上北では、幼児に対するさまざまな支援がそもそも分化していないため、さまざまな支援が「心理的支援」としてひとまとまりに認知され、「心理的支援」としての認知度が高かったと考えられる（都市機能が中程度の地域では、幼児に対するさまざまな支援が分化している一方で、心理的支援の専門性が浸透していないため、逆に心理的支援の認知度が低下したと考えられる）。

(6) 今後に向けて

さいごに、本研究の結果、明らかになった3つの知見、それぞれから導かれる実践的示唆を述べる。

本研究の結果、明らかになった第一点目は、幼稚園に対する心理的支援においては、学習面の支援と心理・社会面の支援の区別が曖昧である点である。この知見からは、今後は、幼稚園に対する心理的支援においては、学習面の支援と心理・社会面の支援を区別することなく、むしろ、両者を統合したような支援の在り方を提案、実践していくことが重要であると考えられる。本研究の結果、明らかになった第二点目は、幼稚園においては、学習面と進路面の支援に対する潜在的ニーズが存在する点である。学習面、進路面については、幼稚園関係者は心理的支援のニーズを感じているが、その具体的なあり方を認知していない。今後は、学習面、進路面の心理的支援について、支援者側から支援のいくつかのモデルを提供することも重要であるが、それ以上に、幼稚園関係者がどのようなニーズをもっているのかを丁寧にききとり、そのニーズに合わせた形で支援のあり方を提案、実践していくことが重要であると考えられる。本研究の結果、明らかになった最後の点は、都市機能の程度に応じて心理的支援の認知度が異なる点である。今後は、都市機能がそれほど充実していない地域については、その他の医療機関、福祉機関などと連携して、そもそも、幼児に対してさまざまな支援が可能であること、つまり、幼児に対する支援が分化していることを幼稚園関係者に伝えていくことが重要である。そして、都市機能がある程度、充実し、幼児に対するさまざまな支援が分化していることが認知されている地域については、心理的支援がどのような支援を専門的に行うのかを伝えていくことが重要である。支援が分化していること、および、その中でも心理的支援が専門性を有することを幼稚園関係者に伝えていく際には、やはり、実際の

支援を提供していくことが一番、有効な方法であると考えられる。財政的問題、人材の問題に鑑みれば、地域の中に拠点校をつくり、その幼稚園で心理的支援を実践し、その成果を地域全体に広報していくという方法が最も現実的な方法であると考えられる。

謝辞

本研究をおこなうにあたり、年度末のお忙しい中、質問紙調査にご協力いただきました幼稚園関係者のみなさまに感謝申し上げます。ありがとうございました。

引用文献

- 伴碧・管田貴子・増田貴人（2009）青森県における子育て支援の実態と保護者のニーズに関する調査（2）－担当保育者への質問紙調査をととして－。弘前大学教育学部紀要，102，75-85.
- 千原美重子（2009）。学校臨床心理士の発達支援に関する研究－活動内容，連携，緊急支援についての分析－。奈良大学紀要，38，127-136.
- 石隈利紀（1999）。学校心理学Ⅱ教師・スクールカウンセラー・保護者のチームによる心理教育的援助チーム。誠信書房。
- 管田貴子・増田貴人・伴碧（2009）。青森県における子育て支援の実態と保護者のニーズに関する調査（1）－保護者へのインタビューから－。弘前大学教育学部紀要，102，67-74.
- 増田貴人・管田貴子・伴碧（2009）。青森県における子育て支援の実態と保護者のニーズに関する調査（3）－保育者への調査によるニーズの把握と今後の課題－。弘前大学教育学部紀要，102，87-96.

望月彰・工藤英美・山本理絵（2013）。保育園・幼稚園における子育て相談と親のニーズとのズレ－全国調査（保育・子育て3万人調査）の経年比較より－。人間発達学研究，4，47-64.

三宅篤子（1994）。第三章 乳幼児期の心理診断。伊藤隆二・橋口英俊・春日喬（編）人間の発達と臨床心理学2 乳幼児期の臨床心理学。駿河台出版社。pp.91-120.

文部科学省（2014）スクールカウンセラー等配置箇所数，予算額の推移。http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/__icsFiles/afldfile/2014/11/14/1341643_1.pdf（2016年1月5日取得）

文部科学省（2015）。「チームとしての学校の在り方と今後の改善方策について」（チームとしての学校・教職員の在り方に関する作業部会 中間まとめ）。http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/__icsFiles/afldfile/2015/07/28/1360375_02.pdf（2016年1月5日取得）

中島義実・原田克己・草野香苗・太田宣子・佐々木栄子・金井篤子・蔭山英順（1997）。義務教育現場における教員の期待するスクールカウンセラー像。心理臨床学研究，15，536-546.

山本麻実子・辻河昌登・辻河優（2009）。大阪府私立幼稚園におけるキンダーカウンセラー活動に関する調査研究。心理臨床学研究，27，88-94.

（2016. 1. 15 受理）

ⁱ 本研究は、弘前大学大学院教育学研究科心理臨床相談室で企画した「学校に対する心理的支援」ニーズ調査事業の一環として実施した。